

サタジット・レイ（1921-1992）は、インドを代表する映画監督であり脚本家、作家、美術家でもあります。ベンガル地方（旧カルカッタ、現コルカタ）の著名な文学者の家に生まれ、1955年にデヴュウ作『大地のうた』でカンヌ映画祭で国際的な名声を早くも確立し、インドにおける芸術映画（パラレル・シネマ）の先駆者として知られます。生涯に36本の作品（長編29本、ドキュメンタリー5本、短編作品2本）を残します。

インドという国家は、多民族・多言語国家の典型とされ、北インドを中心としたヒンディー語話者は、単一の民族というより共通の言語を持つ多様なグループの集合体とされ、国内の約43.6%がこれに当たり、一方主に西ベンガル州に居住し国内第二の大きな言語グループがベンガル人であり、国内の約8%を占めます。また、独自のカースト制度からすれば、ベンガル人の中にもバラモン（最上位）から不可触民（ダリッド）まで存在しますし、ヒンディー人の場合、カーストの影響力は極めて強く、どのカーストに属するかが決定的な意味を持つようです。言語という横のつながり、そしてカーストという縦のつながりが併存していることになります。歴史的に差別されてきた低位カーストや部族に対して政府は公務員採用や大学入学の「留保制度（クォータ制）」を設け、これによりヒンディー人であれベンガル人であれ低位カースト出身者が高学歴で高収入という層が増え、伝統的なカースト=経済格差は都市部を中心に崩れつつある状況にあるとも言われます。こうしたインド社会の複雑さは理解し難いところを残します。しかし、今や世界最大の人口を誇り、国際的にもその存在感を高める姿に不気味ささえ感じられます。

インド映画界に目を移せば、長らくムンバイを拠点とした「ボリウッド派」とコルカタ（旧カルカッタ）を拠点とした「パラレル・シネマ派」という対照的な二つの流れが併存していました。娯楽路線を確立させたのは「ボリウッド派」であり、1947年の独立以降に分離独立の悲劇や貧困を忘れるための夢を映画に求め製作が行われ一般大衆の強力な支持をえました。「パラレル・シネマ派」は1955年のサタジット・レイの『大地のうた』がその最初とされ、そのデヴュウ作はイタリアン・ネオリアリズモの影響と衝撃を受け、スタジオセットや歌・踊りの一切を排除し、実際の村での非職業俳優を使いインドのありのままの貧困と美しさを表現していきました。1960年代から両派の二極化が鮮明となりながらも、ボリウッドの極大化とパラレル・シネマの深化が進んでいくことになります。

昨年、「サタジット・レイ レトロスペクティブ 2025」が催され、1970年代に岩波ホールで公開された『チャルラータ』（1964）『大都会』（1963）（今回は『ビッグ・シティ』というタイトル）と日本劇場初公開となる5作の計7作品が公開されました。この中からまず、本邦初公開の『音楽サロン』と『臆病者』の2作の寸評を載せたいと考えます。

『音楽サロン』は1958年の作品で、すでに高い評価を獲得している『チャルラータ』（1964）『ビッグ・シティ』（1963）の前に公開された作品です。没落貴族（大地主）の破滅に到る様を新興の金貸の成金の勃興と対比させて描き、貴族としての矜持を貫く姿はさすがに痛々しく心に響きます。所有する土地の大半を洪水で失い、凶作も重なれば経済的基盤を失うことに

なりますが、主人公たる貴族は旧家の格式と様々な儀式の挙行を従来通り実施することで滅亡を早めていきます。加えて父親の病期見舞いに出向いていた妻子を儀式の実行日に合わせるために帰りを急がせ嵐に遭遇し、搭乗した船の沈没で二人とも亡くしてしまう悲劇も起こります。新興成金（彼は人々から尊敬されることは無理だと自覚していることで、金に糸目をつけず派手に音楽家を自宅に招き有力者たちを集め演奏会・舞踏会を開きます）の行動に対抗心を燃やした貴族はなけなしの金を使って音楽会を催します。このシーンは本作の白眉となるでしょう。インド音楽にも造詣の深いサタジット・レイは有名どころの音楽家をここで大々的に投入します。そして、音楽会の後に貴族の残したものは（主として経済的基盤）は皆無になっています。音楽サロンでの華やかさが過ぎれば残されたのは破滅の道であり、これも貴族としての流儀であり美学と考えたいところです。サタジット・レイは、この物語を的確なリズムとトーンで揺るぎない演出を行います。その有効性は、パンフォーカスを多用したり（カメラはスブラタ・ミトラ）、静謐さを保ちながらも繊細に心理描写を的確に捉える音楽（音楽の担当はシタール奏者として著名なヴィトラヤト・カーン）を用いることで明らかです。特にここで通奏低音的に全編を貫く音楽は、武満徹を想起させるほどの沈黙の意味を十分理解した上での繊細かつ精緻な音の扱いであることを付け加えておきます。恐るべき作品です。

『臆病者』（1965）は、70分の中編作品です。このレトロスペクティブで上映された『聖者』と二本立てで当時公開された記録があります。（『聖者』は上映時間67分）この作品の主演女優マドビ・ムカルジは、『チャルラータ』『ビッグ・シティ』にも主演した雰囲気を持ったレヴェルの高い俳優です。学生時代恋人同士だった二人が、親族の反対などがあり別れざるを得ない状況に陥り（出自・家庭の格差といったものが間接的に窺われる）、その後数年を経て偶然顔を合わすことになります。しかし、彼女、アリには茶葉のプランテーションを経営する富裕なかなり年上の夫がいます。彼、ロイは失恋後脚本家として身を立てたようで、偶然の出逢いは取材旅行の途中でした。ロイは復縁を望み、何とかアリの気持ちを惹きつけようとしします。というストーリーですが、映画の題材としてはよくあるパターンであり、新味に欠ける陳腐な作品になってもおかしくないのですが、サタジット・レイはそうした凡作にはありません。その理由は、そこには緊張感が漂い、「沈黙」と「視線」の演出があったからではないでしょうか。科白で説明しすぎない手法が実に効果的に機能しています。（この手の作品で筆者が素晴らしい作品と思えたのはフランソワ・トリュフォーの『隣りの女』（1981）でした）抑制することに徹した感情表現が一層強く感情を感情を表したとも言えます。この辺りは、成瀬巳喜男を想起させます。成瀬巳喜男は逃げ場のない日常、言葉にはできない男女の機微を淡々とかつ冷徹なまでの凝視で描く人でしたが、何か通じるものをここで強く感じてしまいます。家庭を捨て自分と一緒に付いて来る意思があれば駅まで来てくれというロイの言葉に無関心を示すアリでしたが、彼女は駅にやって来ます。このアリの気持ちを考えた場合、筆者は何種類も思いを巡らせました。考えれば考えるほど解釈はさまざまに広がるのです。本作のタイトル『臆病者』にしても意味深長です。これは究極の恋愛ドラマの一つであり、アリとロイの気持ちが痛いほど伝わる作品です。